

乳がん検診（施設）

動 向

本邦における乳がんは罹患率、死亡率ともに近年なおも上昇傾向にあり、悪性新生物死亡全体に占める割合は平成18年に8.5%となっている。神奈川県は乳がん標準化死亡率は全国ワースト4位である（平成18年度厚生労働省老健局老人保険課調べ）。さて死亡数の削減対策として、旧厚生省は乳癌検診を昭和62年から老人保健法に基づいて義務づけ、30歳以上を対象に視触診検診を実施している。その後、視触診のみの検診では死亡率の改善が見られないとのことで、平成13年4月にマンモグラフィ併用検診法のガイドラインを提示し、厚生労働省は平成17年度からは40歳以上の女性を対象にマンモグラフィによる検診を原則とすると通達している。

これに先駆けて、当協会では昭和48年以来、乳癌検診として視触診法を行っているが、平成5年1月からは横浜市の委託により、市内住民の40歳以上を対象に5年間隔でマンモグラフィ（MLO撮影）併用視触診法を行い、次いで平成13年10月以降は、50歳以上を対象に隔年のマンモグラフィ併用検診を、次いで平成17年7月から40歳代に限り二方向撮影（MLO、CC）を隔年に施行している。

近年、頓に乳癌に対する関心、特にマンモグラフィ検診の意識が向上し、マンモグラフィ併用検診者は激増し、それに加えて超音波検査の受診者も増加している。

また弊会は18年度からNPO法人乳房健康研究会と共に乳がんの早期発見、早期治療を目指す、“ピンクリボンかながわ”事務局を設置し、その活動に積極的に取り組み、乳がんについての知識の普及、啓発、検診受診率の向上に専念している。

今回は平成19年度の乳がん施設検診の実績を纏め、些かの考察を行う。

方 法

- 1) 視触診検診法：各種団体の被保険者、その配偶者、さらに個人申し込み者を対象に視触診を施行。
- 2) マンモグラフィ併用視触診検診法：希望する個人、団体に対してはマンモグラフィの二方向撮影（MLO、CC）を、また、前記の横浜市施策検診を施行している。加えて視触診と、自己触診法の指導を行っている。尚マンモグラムについては後日ダブルチェックを行い、要精検者を判定している。
- 3) 超音波検査併用検診：希望者に施行している。

結 果

平成19年度の受診者数は、20,686人で昨年度より2,210人増加している。その内訳では、視触診検診法（視触診群）による受診者は7,203人で前年度より786人増加し、マンモグラフィ併用視触診検診法（MMG併用群）による受診者は9,584人で1,608人、

20%増加している。尚精検施行後の経過観察者（経過観察群）は184人減少している。

視触診群では要精検者は5.40%で、精検受診率は86.38%である。発見乳癌は6例で、発見率は0.08%である。早期癌は2人で初回の検診受診者（初診）から1例と、繰り返し受診者（再診）からの1例で、いずれも有自覚者である。一方無自覚での受診者が1例あるが、全例臨床的に触知可能である（表2）。

MMG併用群では要精検者は927人の9.67%で、精検受診率は81.45%である。発見乳癌は30例で癌発見率は0.31%である。そのうち早期癌は19例で、63.3%を占めている。検出乳癌は全例がマンモグラムに腫瘍、構築の乱れ、石灰化像等の異常所見を認め、非浸潤性乳管乳癌（DCIS）の5例は石灰化像が優位な診断根拠となっている。さて発見乳癌のうち初診者からは22例で、そのうち早期癌は14例（含、DCISの3例）を占め、一方再診者からは8例で、そのうち早期癌は5例（含、DCISの2例）である。また、乳癌症例のうちの半数が有自覚者で、そのうち9人が進行癌である。反面、無自覚者のうちでは2人が進行癌である。臨床的に非触知の乳癌症例は5例で、そのうち3例がDCISである。年齢階級別の乳癌は、30歳代からは1例で、38歳の早期癌である。年代毎に漸増し、60歳代には12例である。70歳代に4例あり、最年長者は77歳の早期乳癌である。希有な症例として両側乳癌の1例を検出している。症例は60歳の再診者で、無自覚で臨床的にも非触知例で、マンモグラムの石灰化像と構築の乱れから検出したDCISである。

尚、超音波検査は精検者全例に施行しているが乳癌検出に極めて有用である。

次いで、精検後の経過観察者は3,899人で、発見乳癌は15例で、発見率は0.38%である。早期癌は11例で、うちDCISを2例検出している。尚70歳の豊胸術後乳癌の1例に遭遇している（表4）。

考 察

今年度の検診結果から、有自覚者は自発的に専門医療機関を受診し、無自覚者は積極的に検診に参加するよう一層の勧奨が肝要である。乳癌検診にはマンモグラフィが極めて有効であるが、しかし乳腺密度の高い乳房には精度が低く、特に50歳未満の高濃度乳房検診にはマンモグラフィの二方向撮影に超音波検査の併用が必須であり、また視触診も蔑ろにすることができない。

爾後の検診課題は一層の検診受診率の上昇対策と、各種検査法の各年齢層に対する適応、アナログマンモグラフィのデジタル化、コンピュータ支援診断（CAD）、並びに超音波検査とエラストグラフィ等の精度向上にある。以上

関係の集計表は95頁に掲載